

### 「福」二題

前号で「筑前洪武」と呼び慣わされている類品の中に、武字の止劃が「土」に見えるものを紹介しました。果たしてそれは、職人の意図的な差配に拠って生まれたものか、又は、鋳溜りや鋳不足から生じた偶然の産物だったのかは判りません。

我が邦では、渡来錢を通貨として流用させていた時期があり、西国大名や京畿を中心とした有力者が何時しか、流通する渡来錢を母型として銅錢を鋳造し始め、そこから生み出された銅錢を「ビタ（鏹）」と呼んで、使用当時から渡来錢とは選別されていました。

寛永通寶が発行され、鏹錢を含む渡来錢の使用が禁止されましたが、それらを蒐める人達が元禄年間には生まれていたようで、多くの古錢蒐集家が輩出した寛政年間（一七八九年〜）ころには、「水戸錢」「加治木錢」

などの名称で「鏹錢」を選り分けていたことが今に残る錢書で確認できるのです。

その鏹錢には色んな形態があり、渡来錢をそのまま写したものが多くを占めますが、母型を鋳型から取り出し易くするために、錢文をハッキリさせるために鑿で削ったり、用いる銅を少なくするなど、文字や錢牀が加工され本来の姿から変化したものも生まれ、例を挙げるならば、五代・南唐の唐国通寶篆書の「骨唐国」、北宋・治平元寶の「順平」、同・熙寧元寶「錠熙寧」、同・元豐通寶「二寶」、同・政和通寶「綿政和」などがあり、更に、新たに錢文を起こした「山頭手」「右長元祐手」「叶元祐手」「長崎元豊」などが加わりますから、それらの選別、入手は穴あき錢愛好者にとって

は堪らなく楽しい世界として、熱心な鏹錢蒐集家が輩出したのです。古泉家の心を掴んで離さなかった鏹錢のうちで、錢文に「福」という

文字が想起される面白そうな二手を今回は取り上げてみました。

数多くの渡来錢の中で、北宋・第五代英宗の治世に発行された治平元

#### 拓図①「符合泉志」初編・正字

福平の基となったもの



#### 拓図②「福平の治平」



#### 拓図③「福平の治平」



寶のうち、我が先師が編纂された『符合泉志』初編に、「正字」篆書・九位として分類（拓図①）されたものから鋳写しされ、「治」が「福」に見えるかのように文字が加刀されたものがあります。それを古泉家は「福平の治平」（拓図②③）と呼び慣わして愛玩してきました。

それは本来の「治」字が「福」の字に見え、なるほど三水偏が「示」となり、「台」に当たる字劃が「畠」のようですからこの名が生まれたようです。

「福平の治平」の名は、「示治」という方が早くからあったようで、今井風山軒『古泉大全』甲集では「示治」七位として掲載され、昭和八年の東洋貨幣協会発行『貨幣』第百六拾六號掲載の「錢の呼び名」六十九で、金山人が「福平の治平」を紹介する中で、「示治の治平とも呼ばれるが、福平の治平のほうが通りがよい」とされているのを見ても、「示治」の名が早くに在ったことが判ります。

穴錢堂『長崎・加治木系諸錢図譜』の中でも、「福平治平」を紹介した傍に「示治平」の名を丸括弧で示されているのはご存知のとおりです。更